

年間読書量調査から見えてきたこと

国語科 島村潤一郎

5年前から、年間読書量を調査してきている。国語力と年間読書量との間に何らかの相関関係があるのではないかと考えてのことである。様々な調査から両者の間に相関関係があることが浮かび上がってきたが、今回は五教科にそれを拡大してみた。当初、予想もしていなかった結果がそこから浮かび上がってきた。

キーワード：読書

まずは私が去年の校内研修会で出した資料をお読みいただきたい。

手段は目的に従属する。目的を達成するために何らかの手段が講じられる。であるならば、何らかの手段が講じられた場合、それが目的を達成するためにどれだけの効力を持ったのか、必ず検証されねばなりません。有効性を認められた場合、それは継続、もしくは拡充され、有効性が認められなかった場合、それは縮小、もしくは廃止されねばなりません。こうしたフィードバックがなされない場合、思いつきで始められた仕事や慣習が、有効性を検証されないまま惰性的に続き、仕事のための仕事、書類のための書類、会議のための会議に振り回され、構成員がどんどん消耗していくことになり、やがては組織そのものが疲弊していくという本末転倒の事態がひきおこされてしまいます。2005年、終戦から60年ということで、あの戦争に関する書物が何冊か話題になり、私もその何冊かを読みましたが、あの戦争の敗因として、多くの論者が異口同音に、今述べたような「手段の自己目的化」と「合理的思考の欠如」を挙げていることが非常に印象的でした。日本型組織の病弊はなかなか変わらないものらしく、去年の夏、日本のメガバンクに就職しながら、その後、外資系

に転職した友人と飲みましたが、彼等の組織の違いとして、「コストパフォーマンス的な考え方の有無」を挙げているのも、また印象的でした。

私はここ何年か読書の重要性をいろんな場で説いてきました。であるならば、読書の奨励がコストパフォーマンス的に理に適っているということを実証する責務を負うということになるはずですが、

59回生の現代文を私は3年間担当しましたが、ちょっとした賭けに出してみました。ある意味でこれは冒険でした。問題集を長期休暇中の宿題に全くしなかったということです。3年間で買わせた問題集は2冊で、あとは生徒の自由に任せました。その代わりに、特に力点を置いた点があります。それが読書指導の充実です。問題集などの課題は、読書の奨励によっても代替できるのではないかと考えたのです。これには訳があります。今から2年前のこの研修会で、私は「年間読書量と大学合格力」という資料を出しました。文系上位でも本をあまり読んでいない生徒は東大に落ちていたり、それより下の生徒でも年間読書量100冊以上の生徒が京大に合格していたり、読書の大切さを非常に痛感させられるということがあったのです。しかし、前のレポートには一つの不備がありました。受ける大学がばらばらで、一概にその可否を年間読書量と結びつけられないとい

う点です。極端な話、読書をする生徒が高望みをし、しない生徒が確実にうかりそうなところばかりを受験したならば、前者よりも後者の合格率が高いという結果も出て来かねないわけです。同じ土俵の上で、比較は行われねばなりません。それで初めて客観的に正確な分析ができたと言えることになるはずです。今回の資料はそうした反省を踏まえた続編です。今回は年間読書量とセンターの成績の相関関係を調べてみました。

57回生からずっと、夏休み明けの第3回基礎学力試験の成績をもとに調査を行ってきました。年間読書量30冊以上をa層とし、10冊以上30冊未満をb層とし、10冊未満をc層とし、それぞれの平均点を調べてみたのです。さらに2年7月に漢字テスト、3年10月に語彙テストを行い、同様のことをやってみました。a-cの数値を100点満点に換算したものをグラフにしてありますが、正の相関関係が顕著な

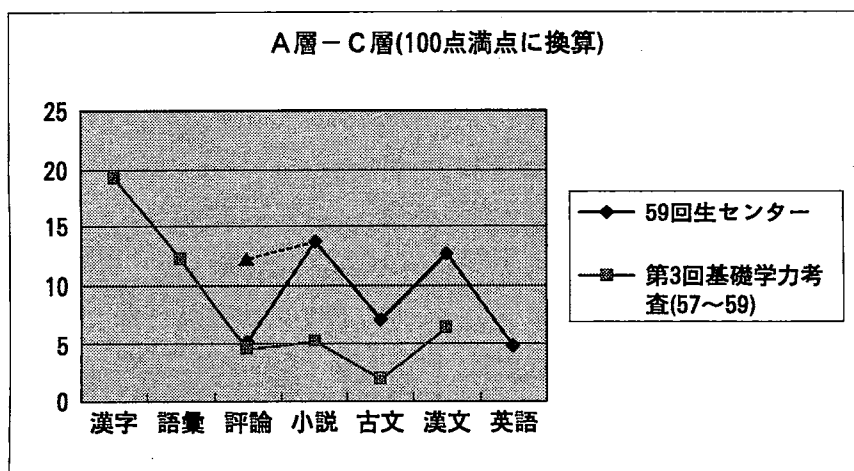
方から順番に見ていくと、漢字、語彙、漢文、小説、評論、古文という順番になります。3年間のデータを踏まえたものなので、国語力と年間読書量の相関関係に関しては定式化されたと言ってもいいと思います。以下二点述べますが、これはまだ59回生のみでのデータなので、「こうしたことが推論できる」というレベルの話とお受け取りください。

推論1

2年夏休み明けの時点であったa層とc層の差は入試の時点でさらに拡大する。

まずグラフをご覧ください。一目瞭然です。a-cの数値が評論以外2倍もしくはそれ以上になっています。(評論は点線のようになってしかるべきなのに、何故そうならないかは後ほど詳述。)これ

	全体	評論	小説	古文	漢文	英語
a	168.4	44.0	44.1	39.8	40.4	178.5
b	160.9	43.7	39.6	38.9	38.8	176.3
c	149.2	41.4	37.3	36.3	34.1	169.0
a - c	19.2	2.6	6.8	3.5	6.3	9.5
換算値	9.6	5.2	13.6	7.0	12.6	4.7
基礎学	4.5	4.5	5.2	1.9	6.4	



には二つ理由が考えられます。

読書のいいのは、時間空間を超えて超一流の人間の考え方に触れられることです。それも寝ころびながらでもできるし、なおかつ安上がり。最も簡単な世界の広げ方が読書だと自分は考えます。そういった習慣を身につけている人間とそうではない人間の間には自然と差ができてくるということだと思います。大学に入ってから同じことが言えるのではないのでしょうか。教育実習生を見ていて痛感することですが、本を読んでいない実習生というのは本当に薄っぺらな授業しかできないものです。

さて、もう一つの理由ですが、2年の夏休み明けで勉強に全く身が入らず、学校の授業に背を向け、本の世界やその他の世界に逃避していた生徒も、3年になると、自分の将来をどうするかという問題が目の前にぶら下がってくるため、ある程度勉強に向かうようになります。古典文法なんて完全にちんぷんかんぷんだった生徒でも、基礎的な内容から勉強し直さざるをえないことになります。基礎さえできれば、そういった生徒は普段から本をよく読んでいて読解力、文脈力は身につけているので、基礎はできているけれど本を読まないという生徒と較べると、後者より前者の方が点数をとれるという結果になってしまうのではないのでしょうか。(例 1年1学期中間考査学年最下位だったOくんは、2年第3回基礎学力テストで67点、センター172点。最終的に第一志望に現役合格。本校生徒の潜在能力の高さを痛感させられました。)

もう一つお話ししておきたいと思います。医学部志望者の中にはたまに国語の勉強をなおざりにする生徒がいます。いわんや読書をや、です。彼らに言わせると、「そんな時間がない」んだそうです。気持ちわかります。国語、特に現代文というのは本当に厄介です。どうやって何を勉強したらいいかわからないし、他の教科科目と違って、勉強しても自分が前に進んでいるという実感が得られにくいのです。

ここが他の教科の勉強が優先され、国語の勉強が一番後回しにされる最大の要因だと思います。何を隠そう、私自身もそうでした。高校時代一番勉強しなかったのは国語です。なのに何となく国語で点数がとれたのはひとえに読書のおかげとしか考えようがない、という自分の実感から一連のレポートは始まったわけですが、今日はここにさらに重要な事実を付記しておきたいと思います。c層の平均値を下回った生徒で国立医学部に現役合格した生徒が何人いると思いますか。答はゼロです。医学部志望者が力を入れているのは、主に数学、英語、理科です。しかし、国語で大きく足許をすくわれてしまったら、これらの教科で95パーセントとらないと、合格は心許ないということになってしまうのです。(例 国立医学部合格者の国語最低点はPくんとQくんの152点ですが、Pくんは英数理600点で12点しか落としていません。)

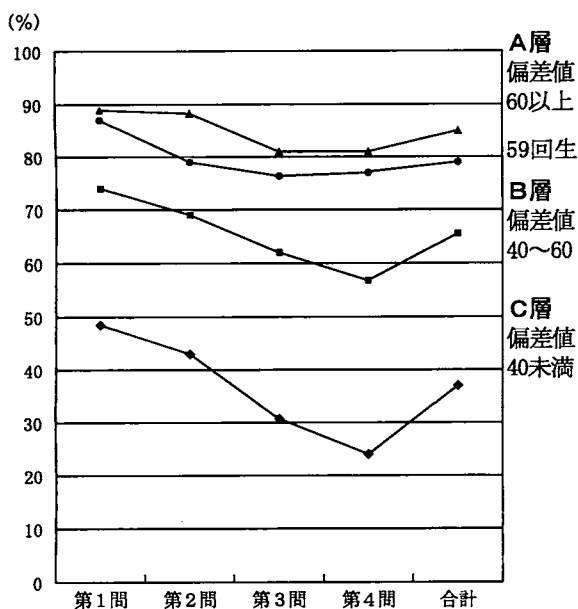
推論2

英語においても、年間読書量との正の相関関係が認められる。

さらにもう一つ仮説を立ててみました。英語も国語と同じように言語なのだから、読書で培われた文脈力等が当然読解に反映されるのではなかろうかという仮説です。これに関しても同じような方法で数値を出してみました。やはり4.7という正の数字が出ています。なお、地歴公民に関しても同じことを試みようと思わないでもありませんでしたが、世界史、日本史、地理、現代社会、政治経済、倫理と平均点がばらばらで、データのサンプルとなる一科目あたりの受験者も少ないので、今回、調査は見送らせてもらいました。

さて、後述を約束した一つの疑問点があったと思

います。英語の相関関係が国語ほどでないのはわかるとして、何故、評論におけるa層とc層の差がそれほどないのかという点です。2.6点、100点満点に換算して5.2点しかありません。(2Pの資料参照) まず気づくのはc層の平均点の高さです。他の小説、古文、漢文が30点台半ばなのに、評論は41.4点あります。c層の平均点が高いために、a層との差が縮まざるを得ないこととなったのです。では何故c層の平均点が高いこととなったのか。まず注目されるのは評論全体の平均点の高さです。次の資料をご覧ください。



全国的にも校内的にも評論の平均点が一番高くなっています。問題が易しかったため、天井がつかえてa層とc層の差が縮まざるを得なくなったと言えそうです。しかし、もう一つ着目してもらいたい点があります。評論がA層(ここで言うA層はベネッセの資料に基づく偏差値60以上の層)の線に最も近接しているということです。つまり、全国的によく点数がとれた問題なのですが、本校生徒はより点数がとれた、ということです。そろそろ、種あかしをしましょう。出された文章は「住居空間の心身論『奥』の日本文化」というものなのですが、「見えざる奥へといざなわれていくそのプロセスに日本人は

ドラマ性と儀式性を求める」という内容の文章を授業でとりあげてあったんですね。1997年度広島大学で出題された「日本の都市空間と『奥』」という文章を2年最後の授業で取り上げ、どこまでも赤い鳥居が続く京都の伏見稲荷の写真を見せながら、〈奥〉性について語ったのですが、まさにその文章がセンターの問題文でも引用され、またその部分が問題になっているんですね。ですから生徒にしてみれば与しやすかったということです。(例 小説、古文、漢文あわせて150点のところ、合計53点しかとれなかったRくんも、あの内容は覚えていた、50点とれたと言っていました。因みに大問一の問題四などは誤答率0%。受験者116人全員正解。)

とまあ、ここまでが昨年5月の教員研修会に私が出した資料である。ということは、「何のことはない、おまえは過去の研修会用の資料をそのまま研究紀要の原稿に使いまわして、今回うまくお茶を濁そうとしているだけじゃないか」と言われたら、「実はと言うと、そうなんです」と正直に答えるしかないということである。しかし、今回の原稿の目的はまた別のところにあるとも言っておきたい。前回以降の調査検証で浮かび上がってきた事実があるので、それを皆様にお知らせしたいと思った次第なのである。

前回の調査検証には大きな不備が二点あった。一点は、センターの分析が59回生のみということで、「この回生に限った話で簡単に普遍化することはできないのではないか」という反論を斥けきれない面があるということ。もう一点は国語と英語のみで「他の教科科目の場合はどうなのだ」という部分が全く明らかにされていないということである。後者に関しては若干補足しておきたい。地歴公民科に関しては資料の中にもあったように、選択教科ということで、1年分ではデータが少なく、最低2年分あわせて検証してみたいと思ったわけである。理系の

教科科目に関して全く言及されていないのも簡単な話で、読書量と数学理科の成績の間に当然相関関係などあろうはずもないと考えたからである。しかし、今回2年分あわせて、これらの教科についても独自に調査を進めてみたところ、自分の予想を覆す結果が出てきた。その結果が興味深く思われたので、ここにとりあげることにしたのである。

事前の私の予想は以下の3点に集約される。

①文系の教科科目において、センターの得点は年間読書量と正の相関関係を持つ。

②理系の教科科目において、センターの得点は年

間読書量と正の相関関係を持たない。

③年間読書量と最も顕著な相関関係を持つのは国語である。

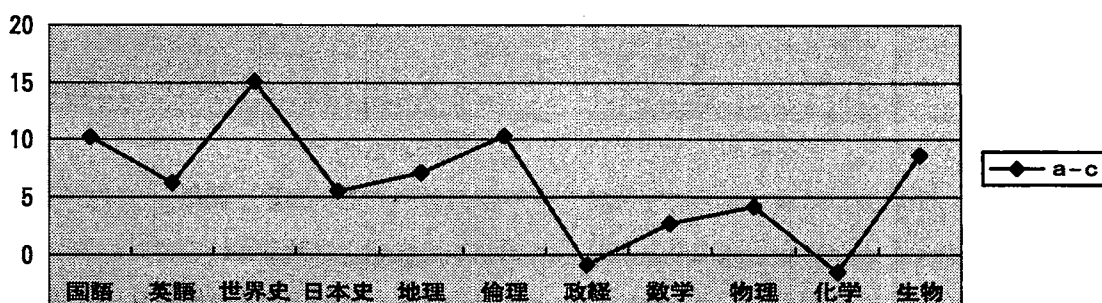
非常にオーソドックスな予想と言えよう。見て「何となくそうだよな」と感覚で思った方もいるのではないかと思う。だが、今回、エビデンスベーストな検証の必要性を私は改めて強く感じた。一般的な感覚と実際の数値がやはり若干ずれることがあるのである。さあ、それではどのような結果が出たのであろうか。まずその表とグラフをご覧ください。

	国語	英語
a	167.5	172.3
b	159.6	167.3
c	147.2	159.9
a - c	10.2	6.2

注：英数国の a - c の数値は100点満点に換算したものの

	世界史	日本史	地理	倫理	政経
a	90.9	80.0	80.5	87.3	79.2
b	84.4	78.7	77.6	80.9	83.6
c	75.8	74.5	73.4	77.0	80.1
a - c	15.1	5.5	7.1	10.3	-0.9

	数学	物理	化学	生物
a	163.9	90.4	86.8	81.5
b	160.3	84.0	88.1	74.1
c	158.4	86.2	88.3	72.9
a - c	2.7	4.2	-1.5	8.6

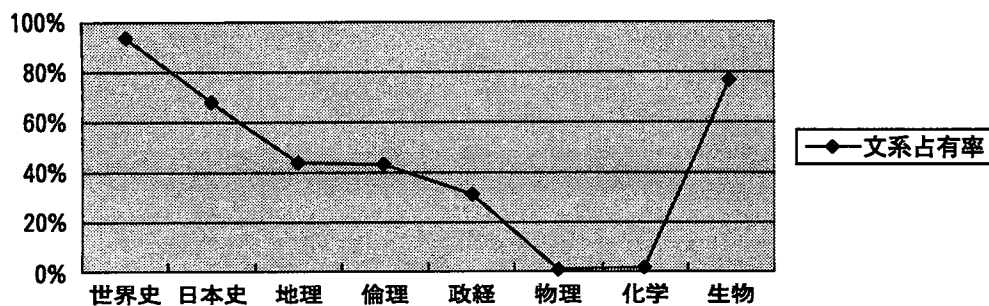


まず地歴公民科から見ていきたい。a - cの数値が、世界史15.1、日本史5.5、地理7.1、倫理10.3と顕著な相関関係を示しているのに対し、政治経済だけ数値が-0.9となっている。(現代社会に関しては2年あわせてもサンプルとなるデータが少なかったのが昨年同様調査を見送った。)次に理系教科を見てみたい。数学2.7、物理4.2、化学-1.5という数字が

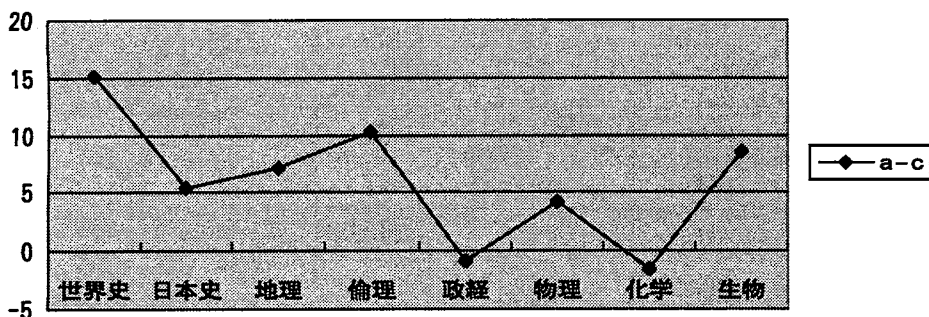
出てきている。このあたりはある程度予想されたことである。意外だったのは生物の結果である。8.6という一部の文系教科科目よりも高い数字が出てきたのである。文系科目である政治経済と、理系科目である生物のこの不思議な対照を私は面白く思った。では何故このような結果が出たのであろうか。選択科目の文系占有率を次に提示してみたい。

世界史	日本史	地理	倫理	政経	物理	化学	生物
94%	68%	44%	43%	31%	1%	2%	77%

これをグラフにしたものを次に載せる。



さて前出のグラフを選択科目に絞った形で今一度ここに載せてみたい。



二つのグラフをお比べいただきたい。お気づきであろうか。完全にはいかなないまでも、重なってくる部分があるのである。特に注意を喚起したいのは、世界史と生物である。地歴公民科で最も顕著な相関関係を示した科目と理科で最も顕著な相関関係を示した科目の文系占有率が、その教科の中で最も高いパ

ーセンテージを示しているということである。

どうやら先に挙げた①②③のテーゼはこう言い直した方がよさそうである。

文系教科である国語、英語、及び文系生徒が多く選択する理科、地歴公民科の科目においては、センターの成績と年間読書量は顕著な相関関係を持つ。

そして、最も顕著な相関関係を持つのは、国語ではなく、世界史である。

だが、課題が残されてないわけではない。今回、先にあった「2年夏休み明けの時点であったa層とc層の差は入試の時点でさらに拡大する」という推論も一歩踏みこんで検証してみたいと考えたが、60回生のデータが残っておらず、検証はできなかった。これに関しては、来年度61回生のデータと合わせる形で検証してみたいと思っている。それから「本はたくさん読んでいるのだが、何故だか異様に成績が振るわないという生徒がどの学年にも必ずいる」という事実をどう説明するか、という点も課題である。これに関しては最近気づいたことがある。そうした生徒が多量に読んでいるのは、どうも見ていると、ライトノベルというやつなのだ。あの手の小説はどれだけ読んでも読解力の涵養にはつながってこない、私は見ている。やはりそれ相応のものを読まない意味はないのである。調査時に「ライトノベルは除く」という条件を付帯させねばならないのではないかと、最近私は考え始めている

さて、そろそろまとめに移りたい。年間読書量と国語の成績には相関関係があるはずだと考え、5年前から調査を開始し、その後徐々に調査対象を広げてきたこの研究だが、調査開始時には思ってもいなかった収穫を今回私は得ることができた。相関関係を持つのは何も国語だけではないということが明らかになったのである。一つの目安として、3ポイント以上の数値があれば有意差と認められると私は思っている。ということであれば、数学、化学、政治経済、この三つ以外の教科科目において、広く読書の有効性が認められたことになると言ってさしつかえあるまい。これだけはっきりとした結果がでてきているのであるから、今年の研修会でも意見が出されていたように、学校全体の取り組みとして、朝の10分間読書など、生徒を良書へと向かわせる活動を広く展開させていくのも本校の一つの選択肢なので

はないかと私は考える。